今月のTOPIC

ドキュメンタリー映画『バナナの逆襲』DVD 発売！

2016 年 2 月から全国の劇場で公開となったバナナをめぐる " 甘くない " ドキュメンタリー映画『バナナの逆襲』がついに DVD になりました！

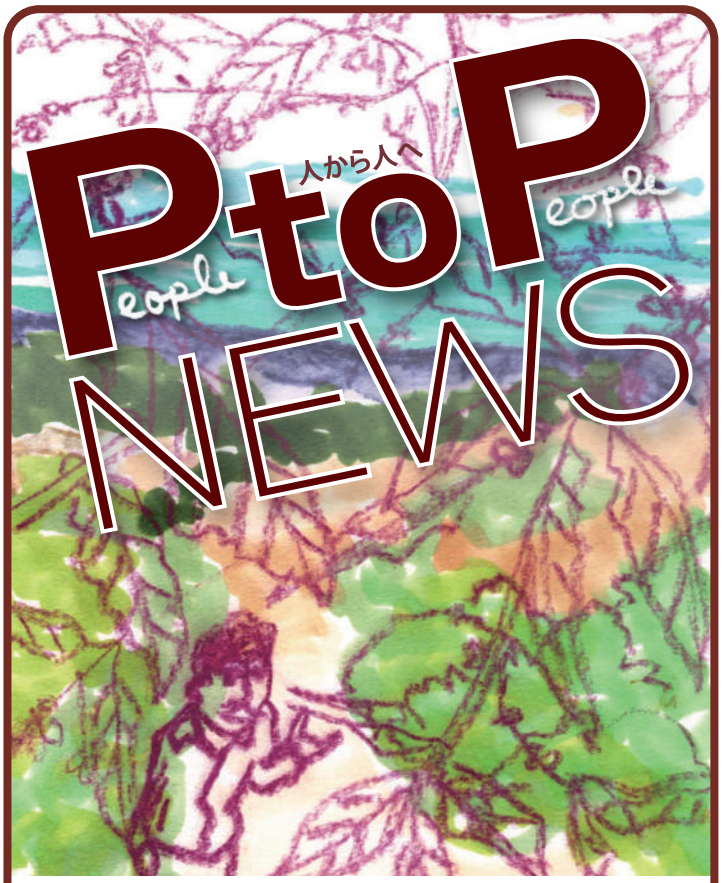
ニカラグアのバナナプランテーションにおける農薬被害と農園労働者たちの闘いをめぐる第 1 話「敏腕?弁護士ドミンゲス、現る」（原題 Bananas!*）、報道・言論・表現の自由をテーマにした第 2 話「ゲルテン監督、訴えられる」（原題 Big Boys Gone Bananas!*）、それぞれが投げかける問題は、日本に暮らす私たちにとっても決して他人事ではありません。特に、フィリピンのバナナプランテーションの農薬問題のオルタナティブとして、そして小規模農民の自立をめざす民衆交易として、バランゴンバナナを届けてきた ATJ と APLA としては、この映画を一人でも多くの人に観てもらいたい！と、映画の広報に全面的に協力してきました。劇場で見逃してしまった方はもちろん、すでにご覧になった方もぜひ DVD を購入して、ご家族やご友人など周囲の方におススメしてくださいね。

●ご購入・お問合せは、APLA 事務局（電話：03-5273-8160
FAX：03-5273-8667　E-mail：shop @apla.jp）まで。
【各話】個人視聴用 3,000 円＋税、図書館用 15,000 円＋税
【2 話セット】個人視聴用 5,000 円＋税、図書館用 25,000 円＋税
※自主上映会を開催される場合は、別途お申込みが必要です。

特定非営利活動法人 APLA（Alternative People's Linkage in Asia）
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし、「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。【HP】http://www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン（ATJ）
バランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔の見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。【HP】http://altertrade.jp/

過去のニュースはこちらからご覧いただけます。
http://www.apla.jp/archives/publications-cat/ptop



人から人へ
2017.4　vol.13
特定非営利活動法人 APLA/あぷら(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
〒169-0072東京都新宿区大久保 2-4-15サンライズ新宿3F
TEL:03-5273-8160　FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp

ここが知りたい！ チョコレート

パラダイスパプアの地元販売はどんな感じ??

地元スーパーの店頭に並ぶパラダイスパプア

「インドネシア・パプア州産のカカオからできるチョコレートをわたしたちも食べたい！」という産地の人びとの願いが実って生まれた『パラダイスパプア』。2017 年の幕開けとともに州都ジャヤプラで販売を開始するや、口伝えでカカオキタの事務所に買いに来る人が後をたたず、店舗や直売りで一月に 500 枚近く売れました。ジャヤプラ以外の地域からも次々に注文が入っています。日本のような宅配は発達していないし、どんな方法で配送していると思いますか? 驚くなかれパプアならではの確実な方法があるのです。それは文字どおり人から人への手渡し。カカオキタ代表のデッキーさんは顔が広く飛行機の搭乗者のなかに必ずと言っていいほど誰か知り合いがいるそうです。空港で「×× さん！」と声をかけられた人は「デッキーさん、久しぶりですね！」「このチョコを○○空港で待っている△△さんに手渡してください！」「おやすい御用です！」という流れです。こうして空港にせっせと通うデッキーさん。運んでくれる人へのお礼はパラダイスパプアだそうです。

津留歴子（つる・あきこ /ATJ）

手渡しのため空港に通うデッキーさん（右）

産地の暮らしを垣間見る 1枚の写真から

『Boun（ボウン） Jaek（ジェック） Khao（カーオ）』

ボウンジェックカーオは「死者に祈りを捧げる儀式」、つまりお葬式です。ラオスは経験な仏教徒が多く、普段からお寺に足を運ぶ人、早朝から托鉢を欠かさない人も多くいます。

お坊さんがお経を唱え、参列者が列を作って順繰りに鉢の中にカオニャオ（蒸したもち米）やお金、お菓子を入れていきます。お経を上げてくれたお坊さんを通じて、亡くなった方への祈りを捧げるのです。

儀式が終わると、皆で食事。参列者は必ずしも知り合いではないですが、食事のときなど、同じテーブルになったら「どこから来たの?」とおしゃべりに花が咲きます。この一連の儀式には莫大なお金がかかるので、以前は村の中で相互扶助があったそうですが、最近は皆お葬式のためにお金を蓄えたり、人に借りたりすることが多いようです。

金色や黄色、オレンジ、ピンク、カラフルな装いに、お花とごちそうにあふれた人びとの集いは、もしかしたら外から見ると何かのパーティのように見えるかもしれません。

後藤翠（ごとう・みどり／ATJ）

特集 東ティモール独立15周年

毎年 5 月 20 日は、東ティモールの人びとにとって、非常に特別な記念日です。のべ 5 世紀にわたる他国による統治から脱却し、ゼロから国づくりを始めた日だからです。1515 年ポルトガルによる植民地支配、第二次世界大戦中の日本による占領、約四半世紀のインドネシアによる強制併合を経て、2002 年 5 月 20 日、東ティモールは主権を回復*しました。独立を勝ち取るまでに犠牲になった多くの祖先たちへの哀悼と敬意を胸に刻みながら、誇りを持って、東ティモールの人びとは国づくりに奮闘しています。

東ティモールの人びとと コーヒー

▲水洗式加工のオリエンテーション

東ティモールのコーヒーは、多くはポルトガル植民地時代に植えられたものです。オルター・トレード・ティモール社(ATT)は、エルメラ県の 20 グループ・約 430 世帯の生産者から買い付けたコーヒーを日本やオーストラリア向けに輸出しています。

独立は果たしたものの、国内産業は殆どといっていいほど発達していません。米や加工品、塩や砂糖など基本的な食料・日用品もまだまだ輸入に頼ったままです。厳しい国内の経済状況において、人口の 4 分の 1 が携わっていると言われるコーヒー産業は、人びとが現金収入を得られる数少ない手段の 1 つです。生産者にとってコーヒーからの収入は家計の大部分を占めるため、毎年 5 月頃から 3 ヵ月間ほどの収穫と加工作業の時期は、家族総出で仕事をします。

ATT が設立された 2007 年当時、コーヒーは赤い実（コーヒーチェリー）の状態で買い付けられていました。今では生産者自身が乾燥までの加工作業をすることで、コーヒーチェリーで売っていたときよりも高い価格で買い付けられるようになりました。

今でこそ、一定の品質を保てるようになりましたが、決して平坦な道のりではありませんでした。最初に試した非水洗加工という加工法では欠陥豆が多く出すぎてしまいました。それでも生産者は諦めず、日本からのアドバイスを受けて、翌年には果肉を除去した後のコーヒーを水に浸け発酵させる加工方法に挑戦。慣れない加工作業は生産者にとって楽でないものの、毎年、収穫シーズンが始まる前に、ATT のスタッフがコミュニティごとにオリエンテーションを実施し、技術向上に励んでいます。また、赤く完熟した実だけを出荷するという基準にも取り組み、日本での品質評価のレベルも上がっています。

ここ数年は、剪定や施肥など、コーヒーの木の手入れ作業も少しずつ実施されています。剪定すると一時的にコーヒーの収量が減ることからなかなか剪定に踏み切れない生産者も多いのですが、実際にやってみると数年後には実の品質も良くなり収穫量も増えたという声も聞かれます。

2015 年にはブラジルから専門家が訪れ、技術指導がなされました。専門家から、選別や加工技術などを褒められて自信をつけた生産者もいます。このような取組みを通して、長い植民地支配から独立を果たし、自らの意志でより美味しいコーヒーづくりを始めた生産者たちは、経済的な独立（自立）の大切さも学んでいます。

時間がかかっても 一歩ずつ着実に

以前は、コーヒー収穫シーズン以外は街に出稼ぎに行くケースの多かった生産者たちですが、今では野菜や果物の栽培、魚の養殖なども実践し、コーヒーだけの収入に依存しない暮らしをめざしています。自給用以外で余ったものは、近くのいちばに出せるようになった生産者も出てきています。主権回復から 15 年が経った今日、農村部の人びとの生活が著しく良くなっているわけではありませんが、道路の整備・水不足や電力不足の対策など、インフラ整備も少しずつ進められています。

コーヒーの品質は年々着実に向上し、今では他国のコーヒーと品質的に競えるレベルに辿り着きつつあります。昨年 11 月に東ティモールコーヒー協会が開催した、その年に生産された東ティモール産コーヒーの品評会では、エルメラの生産者のコーヒー豆が出品された全 62 品のうち第 2 位を獲得しました！

▲東ティモールコーヒー協会主催の品評会のトロフィー＆賞状

生産者にとって、品質に厳しい日本に販売できることは、大きな励みです。また、コーヒーを通して、東ティモールという新しい国を世界中の人たちに知ってもらえること、その人たちとつながり、その味で誰かを幸せにできることをとても誇りに思っています。コーヒーは、東ティモールの人びとにとって、大切な財産であり、アイデンティティでもあるのです。

豊かな自然、人びとの陽気さや温かさ、何よりも自分の国をつくるという希望に満ち溢れた東ティモール。今の日本が忘れかけているものがそこにはあるのかもしれません。目先の利益を追い求めるのではなく、大切な価値を守りながら東ティモールらしい国づくりをしていってほしいと願います。

名和 尚毅（なわ・なおき /ATJ）

＊1975 年にポルトガルからの独立を宣言しましたが、直後にインドネシアの軍事侵攻を受けました。2002 年は、「独立」ではなく、「主権回復」と表現します。

農薬や化学肥料は使用しておらず、東ティモール・エルメラの大地で育まれた風味が生きています。